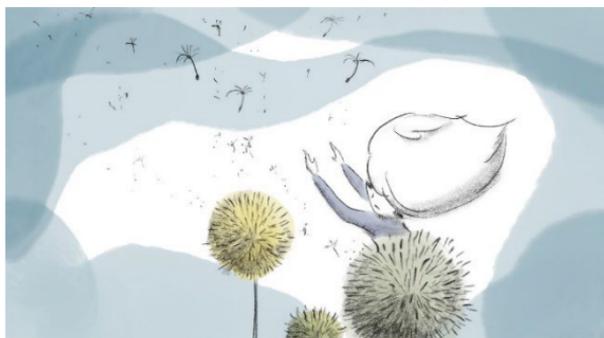


ユヌス・エムレ 心の言葉

イスラーム古典読書会 コラム集



訳・解説 山本 直輝

挿画 グフロン ヤジッド

制作 東京ジャーミイ文書館

ユヌス・エムレ 心の言葉

イスラーム古典読書会 コラム集

「黄色いお花」

「身を焦がすほどの熱い愛」

「何のための学問か」

「絶望」

イラーヒ訳詞集

「黄色いお花」

日本の新しい元号「令和」は、日本最古の歌集である万葉集に収録されている詩が元になっています。さらにその詩は中国、東晋（とうしん）の王羲之（おうぎし）の書『蘭亭序（らんていじょ）』の一節を踏まえたものだと言われています。詩はある土地の世界観や文化背景、歴史を知り、そこに住む人々の心を理解するための最も重要な鍵といえるでしょう。トルコにもまた、「トルコ世界」を形作った偉大な詩人がいます。ユヌス・エムレです。

ユヌス・エムレは 13 世紀から 14 世紀にかけて、現在のトルコ共和国があるアナトリア（アナドル）地域を中心に活動した詩人です。神の偉大さ、自然の壮大さ、人間の美しさと儂さを素朴なトルコ語で高らかにうたい上げた彼の詩は、現在に至るまでトルコ人に広く愛され、トルコの世界観を決定づけました。

2021 年はユヌス・エムレ没後 700 年記念の年でしたので、世界中のユヌス・エムレ・エンステイトゥートが彼の詩や彼にまつわる美術、映画などのイベントを開催しました。

今回の企画では、世界的にもまだ外国語に訳されていないユヌス・エムレの詩を日本語で解説していきたいと思っています。今回取り上げる詩はユヌス・エムレの「おしえて、黄色いお花さん」です。

ねえねえ 黄色いお花さん
あなたのママとパパはだれ？

やあやあ 偉いお坊さん
大地がわたしの両親さ

ハック ラーイラーハイッラッター
(真理とは、アッター以外に神は無し)
アッター ラーイラーハイッラッター
(アッターよ、アッター以外に神は無し)

ねえねえ 黄色いお花さん
子供や兄弟姉妹はいるのかい？

やあやあ 偉いお坊さん
葉っぱがわたしの子供だよ

ハック ラーイラーハイッラッター
アッター ラーイラーハイッラッター

ねえねえ 黄色いお花さん
どうして頭を垂れているの？

やあやあ 偉いお坊さん
神様の前にいるからさ

ハック ラーイラーハイッラッラー
アッラー ラーイラーハイッラッラー

ねえねえ 黄色いお花さん
お顔がまっさおになってるよ

やあやあ 偉いお坊さん
もうすぐわたしは死ぬからさ

ハック ラーイラーハイッラッラー
アッラー ラーイラーハイッラッラー

ねえねえ 黄色いお花さん
あなたもいつか死んじゃうの？

やあやあ 偉いお坊さん
この世に死なないものなんて あるのかい

ハック ラーイラーハイッラッラー
アッラー ラーイラーハイッラッラー

ねえねえ 黄色いお花さん
あなたは誰に従うの？

やあやあ 偉いお坊さん
ムハンマド様に従うよ

ハック ラーイラーハイッラッラー
アッラー ラーイラーハイッラッラー

ねえねえ 黄色いお花さん
わたしは誰だか 知ってるかい？

やあやあ 偉いお坊さん
あなたはユヌスじゃないのかい？

ハック ラーイラーハイッラッラー
アッラー ラーイラーハイッラッラー

「教えて、黄色いお花さん」は、いまでも子供向けの詩としてトルコで愛されています。デルヴィシュと呼ばれるトルコの修行僧たちは「心を磨くと自然があ

あなたの先生になる」といいます。また自然は、イスラームの啓典クルアーンの言葉を伝える「第二の本」だというデルヴィシュの言葉もあります。この詩ではユヌス・エムレもまた、有名な偉い学者やお坊さんではなく、「黄色いお花」を先生としていろんな質問をしていますね。黄色いお花は先生として、ユヌス・エムレにこの世の理を語りかけます。

黄色いお花は、大地が草木を育み、そして草木は育つとはっぱを茂らせるように、自然はお互いを支えあう大きな法則によって動いていることを教えています。また逃れられない命の理として、この世の生きとし生けるものはやがて必ず死を迎えることを語ります。そして、森羅万象を創りだし、すべての生き物の生と死をつかさどる創造神アッラーに尊敬の心を持つこと、そのロールモデルとしてイスラームの預言者ムハンマドに従うことを説いています。

「教えて、黄色いお花さん」は子供向けのほんとうに短い詩ですが、この詩の中には東アジアでいうところの「天・地・人」、すなわち神の偉大さ、自然の美しさと儂さ、そして人の心のあるべき姿が示されているのです。

Sordum sarı çiçeğe
Annen baban var mıdır
Sordum sarı çiçeğe
Annen baban var mıdır
Çiçek eydür derviş baba
Annem babam topraktır
Çiçek eydür derviş baba
Annem babam topraktır
Hak Lâ ilâhe illellah
Allah Lâ ilâhe illellah
Hak Lâ ilâhe illellah
Allah Lâ ilâhe illellah
Sordum sarı çiçeğe
Evlât kardeş var mıdır
Sordum sarı çiçeğe
Evlât kardeş var mıdır
Çiçek eydür derviş baba
Evlât kardeş yapraktır
Çiçek eydür derviş baba
Evlât kardeş yapraktır
Hak Lâ ilâhe illellah
Allah Lâ ilâhe illellah
Hak Lâ ilâhe illellah
Allah Lâ ilâhe illellah

Sordum sarı çiçeğe
Sizde ölüm var mıdır
Sordum sarı çiçeğe
Sizde ölüm var mıdır
Çiçek eydür derviş baba
Ölümsüz yer var mıdır
Çiçek eydür derviş baba
Ölümsüz yer var mıdır
Hak Lâ ilâhe illellah
Allah Lâ ilâhe illellah
Hak Lâ ilâhe illellah
Allah Lâ ilâhe illellah
Sordum sarı çiçeğe
Sen beni bilirmisin
Sordum sarı çiçeğe
Sen beni bilirmisin
Çiçek eydür derviş baba
Sen Yûnus değil misin
Çiçek eydür derviş baba
Sen Yûnus değil misin
Hak Lâ ilâhe illellah
Allah Lâ ilâhe illellah
Hak Lâ ilâhe illellah
Allah Lâ ilâhe illellah



「身を焦がすほどの熱い愛」

第二回は「神への愛」を詠うユヌス・エムレの詩を紹介したいと思います。「神さま」というと皆さんはどんなイメージをお持ちでしょうか。どこか空の上において、我々を見下ろしている仙人のような存在でしょうか、あるいはこの世に未練をもって亡くなり、雷や洪水などの「祟り」を引き起こすようになったおどろおどろしい存在でしょうか。人間はいにしえの時代から様々な神さまをイメージし、いろいろな信仰や宗教を信じてきました。

イスラームの神さまである「アッラー」は人知を超えた次元に存在する創造神であるとされています。我々の理解を超えた超越神でありながら、しかし一方でアッラーは99の名前を持つ「人格神」、すなわち固有の知性、感情、意思をもって己が創造した被造物と関わる神さまです。人格神というとなんだか「人間のような」感情や意思をもつ主体のように聞こえますが、イスラームでは人間が持つ知性や感情、意思こそが実は神さまから与えられた借り物であって、不完全な被造物に過ぎない人間はそれらを完全にコントロールすることはできず、完全な存在であるアッラーこそが知

性や感情、意思を全きかたちで扱うことができるといわれます。イスラームの預言者ムハンマドが伝える言行録には、アッラーがいかにか人の感情とは比べ物にならないほどの豊かな感情を持つ存在であるかを説いたエピソードがたくさんあります。

ユヌス・エムレのようなスーフィー詩人が最も大切にするのは、「愛」という感情で結ばれる神と人のかかわりです。ここでの愛は、アラビア語ではイシュク、トルコ語ではアシュクと呼ばれる単語で、木にまとわりつくツタが周囲の水を吸い上げて、ときにはやがて木を弱らせ枯れさせてしまうような、気を付けなければ己さえも滅ぼしてしまう激しい恋の感情を意味します。

ユヌス・エムレ以前にも、スーフィー詩人たちはこのような情熱的な愛を様々な説話や伝説、詩で表現してきました。もっとも有名な愛にまつわる伝説は、アラビア半島のベドウィンの姫ライラに心を奪われ、恋焦がれマジヌーン（狂人）となってしまった青年カイスの物語でしょう。「ライラとマジヌーン」は、12世紀から13世紀にかけて活躍したペルシア人の大詩人ネザーミー・ギャンジャヴィーによって詩として編まれ、後世のスーフィー詩のみならず、絵画や現代歌謡にも大きな影響を与えました。今回紹介する詩の中でユヌス・エムレは、ライラをアッラーに、心奪われた

カイスを自らに見立て、アッラーへの愛を情熱的に詠っています。また今回の詩の中で呼びかける対象として使われている「あなた」や「師」、そして「真友」はアッラーを指しており、ユヌス・エムレはこの世のあらゆる雑念や煩悩、絆を焼き尽くすような、ただアッラーだけを求め「恋焦がれる」心境を詩で表現しています。

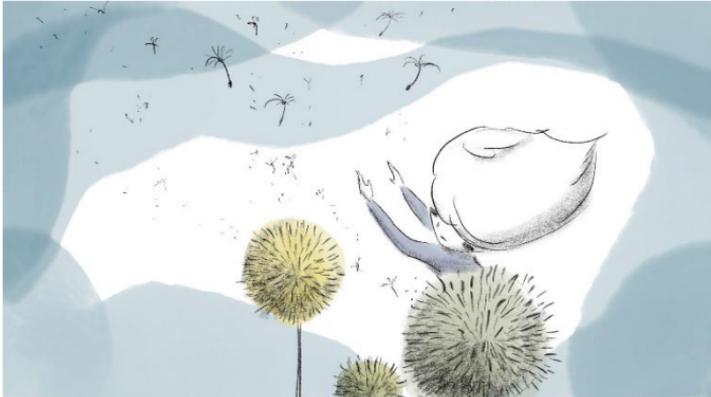
しかし一方でこのような情熱的な愛は、いわゆる「恋に恋する」ような独りよがりの独善的な気持ちとして終わりかねません。面白いのは、ユヌス・エムレもその点を見抜いているようで、「真友の手の中で彷徨い続ける」と詠っているように、実はアッラーはそのような人間の激しい愛の感情とは比べ物にならないくらい人間を愛しているのに、人間は神の愛に包まれていることに気づかず彷徨い続けているのだと語っています。本当の愛とは相手をどれだけ愛せるかではなく、どれだけ愛されているかを感じる心を養うことだとユヌス・エムレは言いたいようです。

愛の渇きに焼き焦がされて 私は歩き続ける
愛は血の泪で私を染め抜く
正気を保つことも、狂いきることもできない
ああご覧よ、あなたを愛したせいで

あるときは風のように吹きすさび
あるときは塵のように這いまわる
あるときは洪水のようにあふれ出す
ああご覧よ、あなたを愛したせいで
私の思いは水のように流れ続け
心は山のように沈み込む
師を想って泣き続ける
ああご覧よ、あなたを愛したせいで
手を握って ここから出して
できないならせめて傍に引き寄せて
泣いたり笑ったり あなたのせい
ああご覧よ、あなたを愛したせいで
歩いて歩いて彷徨い続け
師を讀えたくても言葉足らず
故郷からも遠く遠く離れてしまった
ああご覧よ、あなたを愛したせいで
ライラを愛したマジヌーンのように
風で巻き上がる塵の中に見た気がして
起き上がれども心には悲しみだけ
ああご覧よ、あなたを愛したせいで
哀れなユヌスをごらんない
頭から足の先まで傷だらけ
真友の手の中で彷徨い続ける
ああご覧よ、あなたを愛したせいで

Ben yürürüm yane yane
Aşk boyadı beni kane
Ne akilem ne divane
Gel gör beni aşk n'eyledi
Gâh eserim yellere gibi
Gâh tozarım yollar gibi
Gâh akarım seller gibi
Gel gör beni aşk n'eyledi
Akar sulayın çağlarım
Dertli ciğerim dağlarım
Şeyhim anuban ağlarım
Gel gör beni aşk n'eyledi
Ya elim al kaldır beni
Ya vaslına erdir beni

Çok ağlattın güldür beni
Gel gör beni aşk n'eyledi
Ben yürürüm ilden ile
Şeyh sorarım dilden dile
Gurbette hâlim kim bile
Gel gör beni aşk n'eyledi
Mecnun oluban yürürüm
Ol yâri düşte görürüm
Uyanıp melûl olurum
Gel gör beni aşk n'eyledi
Miskin Yunus biçâreyim
Baştan ayağa yareyim
Dost ilinden âvâreyim
Gel gör beni aşk n'eyledi.



「何のための学問か」

イブン・ハルドゥーン『歴史序説』の翻訳など、イスラーム史研究において多大な功績を残した東洋学者フランツ・ローゼンタールは、イスラーム文明は何よりも知と学問を重んじてきたと述べています。ムスリムの子供たちは、幼少期にはクッターブと呼ばれる初等教育施設でアラビア語の読み書きとクルアーンの素読を学び、その後学問を志す若者はマドラサとよばれるイスラーム諸学を学ぶ寺子屋に行き、イスラーム学者（ウラマー）となるために訓練を続けます。クッターブやマドラサはほとんどの場合、国家や公的機関に所属せず、寄進によって運営される私的な教育施設です。そしてイスラーム諸学を修めたことを証明する免許皆伝（イジャーザ）も、「〇〇のマドラサ発行」ではなく、「イスラーム学者〇〇の承認により授ける」といった形をとります。学問とは国家や会社が管理するものではなく、あくまでも個々人が受け継いでいく伝統なのです。またイスラーム社会では「学者になるには40年かかる。20年は学生として学び、20年は先生として教える訓練をして、その後からが本当の始まりな

のだ」という格言があります。学問とは一生をかけた探求であることをよく示している言葉です。

イスラームの知の営みを体現するものは「本」でしょう。本はアラビア語でキターブといますが、キターブという単語はアラビア語圏を超えて、アフリカや南アジア、中東アジア、東アジア、東南アジアでも共通語として「イスラーム学に関する本」を指します。例えば東アジアでは漢語で書かれたイスラーム書籍は「汉克塔布（ハン・キターブ）」、東南アジアではイスラーム書籍に使われる紙が黄色かったことから「キタツプ・クニン（黄色い本）」と呼ばれます。現地の言葉が分からなかったとしても、「キターブ」という言葉が聞こえれば、そこにはイスラームの知の営みが存在することがわかるのです。イスラーム文明は「キターブ文明」と呼んでも過言ではありません。

さらに、イスラーム文明において「本」は書物だけを指しません。スーフィー詩人たちは、神は自らを知ってもらうために、二種類の本を人間に下したと言います。一つ目は聖典、二つ目は自然です。星の輝きや波打つ海、生い茂る森や灼熱のマグマ、吹きすさぶ風など、自然界に存在する生きとし生けるものはすべて各々に固有の「ことば」で神の真理を追究していると言われます。第一回で紹介したユヌス・エムレの「黄色いお花」の詩も、そのような世界観に裏付けされて

いるのです。またこの自然には人間も含まれています。特に人間の持つ、外からは見えないが人間を振り回して止まない「心」の中に、実は神の深淵なる真理が隠されているのだとスーフィー詩人たちは言います。スーフィー詩人たちにとって真理の探究とは、自然、身体、心は真理の探究へ人々を誘う一つの旅路でつながっています。

スーフィー詩人たちが好んで引用するイスラームの格言に「己を知る者は神を知る」ということばがあります。知っているようでいて実は一番わからないのが自分自身です。今回紹介するユヌス・エムレの詩も、おそらくこの格言から着想を得て書かれたものでしょう。「有名な法学書の〇〇を読みました」と自慢したり、「アッラーのご満悦のために学問に勤しんでおります」など、口では綺麗な言葉をいくらでも並べたりすることは可能でしょう。しかしユヌス・エムレにとって知とは、本をただ読むだけではなく、自己承認欲求を満たすための道具でもなく、真理を求め生きるという「人生の指針」を心に刻み付ける営みなのです。その営みは、己がどういう人間なのかを知ることから始まります。己をしかと見つめることもできない人間が、神について理解できるわけもなく、そのような人間は何を学んでも乾いてばさばさになったパンのように空

虚で味気ない存在に過ぎないのだとユヌス・エムレは
言っています。

本当の知恵とは何なのか
知恵とは己を知ることだ
もし己を知らぬなら
何のための学問か
なぜお前は学ぶのか
真なる御方を知るためだ
学びはしたが 悟っていない
まるで乾いたパンのようだ
「学び悟った」などと嘯くな
「神のために生きた」などと戯けるな
真なる御方を知らぬなら
全ては塵芥の無駄と化す
神より下されし四つの書*
根源の「阿」を指し示す
しかし汝は阿も知らぬ
何のための学問か
ユヌス・エムレはかく語る
望むなら千度マッカに参るがいい
しかし心の探求こそ
何にも勝る巡礼ぞ



Yunus Emre der hoca
Gerekse bin var hacca
Hepisinden iyice
Bir gönüle girmektir
İlim ilim bilmektir
İlim kendin bilmektir
Sen kendin bilmezsin
Ya nice okumaktır
Okumaktan murat ne
Kişi Hak'kî bilmektir
Çün okudun bilmezsin
Ha bir kuru ekmeğdir

Okudum bildim deme
Çok taat kıldım deme
Eğer Hak bilmez isen
Abes yere gelmektir
Dört kitabın mânâsı
Bellidir bir elifte
Sen elifi bilmezsin
Bu nice okumaktır
Yunus Emre der hoca
Gerekse bin var hacca
Hepisinden iyice
Bir gönüle girmektir

「絶望」

今回紹介する詩はスーフィー詩のなかでも「ムナージャート」と呼ばれるジャンルになります。ムナージャートとは「救いを求める」という意味で、人間が神に心を通じて切実に求める救済の願いを表しています。筆者はスーフイズムの研究をしているのですが、どうもスーフイズムというと「神への愛」だとか、「道徳」だとか日常生活から乖離した神秘哲学か、誰にでも言えそうな当たり障りのないお説教というイメージがあります。今回紹介するユヌス・エムレの詩を読んだ時、私は少し驚きました。なぜならそこには運命を受け入れ、神への愛に没入するようなスーフィーとは異なる姿を見たからです。ユヌス・エムレは罪を犯した恐怖を吐き出し、そしてそのような「運命」を与えた神に問いかけているのです。

神はなぜ私を罪や過ちでまみれた存在として創造したのか？ 私が一体何をしたのか？ 取り返しのつかない過ちを犯した恐怖、そして来世の裁きを受けなければならない絶望。ユヌス・エムレはあまりにも正直に感情を吐露しています。

取り返しのつかない過ちを犯したとき、自分はこんなにも弱い人間だったのかと動揺し打ちのめされます。その罪の色が自分の人生のすべてを塗りつぶしていくかのように感じ、自暴自棄になる人もいるでしょう。しかし、スーフイズムではこのような絶望の底に落ちたような感情こそ、信仰の土台となるのです。

中世の高名なイスラーム学者イブン・カイイム・ジャウズィーヤは『求道者たちの階梯』において、以下のような先人の言葉を紹介しています。

先人曰く、“人は罪を犯すことで楽園に行けるかもしれないし、神の命に従順に行動することで逆に地獄の炎に包まれるかもしれない”人々がどうしてそうなるのかと聞くと、こう答えた「罪を犯したとしても、後悔して、安らかに眠ることなく、立っているときも、横になっているときも、歩いているときも忘れずにいれば、本当の意味で悔い改め、許しを乞い、後悔に苦しむことで楽園に導かれるのだ。一方、善い行いをした人は、そのことで頭がいっぱいになり常にそれを思い出し、心が高揚し、誇りを持ち、自己満足に浸るが、これらの感情は自らを破滅へと導く。

イブン・カイイムによれば、信仰というのは善行を積み重ねていくことではなく、後悔を引きずっていく

ことなのです。しかしただ引きずっているだけでは意味がありません。再び同じような過ちはすまいと再び立ちあがって生き続けることです。

ハリー・ポッターの前日譚シリーズの映画二作目『ファンタスティックビーストと黒い魔法使いの誕生』で、犯した罪に苦しむ元教え子に若き日のダンブルドア教授が「私も後悔が私にとって一番親しい友人となってしまう」と静かに言うシーンがあります。

ユヌス・エムレのこの詩も、一時の感情というよりは、長年求道者として生き、生涯抱え続けてきた感情を総括したものに思えます。

後悔と恐怖に満ちたボロボロの感情をアッラーにぶつけるこの詩は格好よくはありません。しかし、神への愛を高らかに詠ったり、神の創造の神秘を美文で連ねたりするよりも、よっぽどまっすぐで美しい詩だと私は感じます。

ああ神さま、もし私を咎めたいのなら
これが私の率直な応えです
確かに、私は出来損ないの罪人です
しかし、私は王たるあなたに
何をしたというのですか
私は何者なのか？

あなたが私を創ったのではないのですか？
慈悲深き神よ、なぜ私を罪で汚したのですか。
目を開ければ私は牢獄に囚われの身
周りは悪魔と誘惑と嘘だらけ
それでも飢え死だけは嫌で
何度も何度も 泥水をすすり生きてきました
私のせいであなたの御力は弱まりましたか？
私みたいな人間が神を超えることなど
一度でもありましたか？
私はあなたが得るべき恵みを損なったことなど
あるでしょうか？
あなたからなにかを奪い、あなたが飢えることなど
ありましたか？
私の命を奪ってもなお、まだ私を
痛めつけるのですか？
肉が腐りきって 私は暗い土の中
あなたは天国に至る
一本の髪の毛のような細い橋を架け
「渡れ」と仰った
それでも結局私はしくじるのだ 自業自得
この髪の毛のように細い橋を
どうやって人が渡れるというのですか？
すべり落ちるか しがみつくか 飛び下るしかない
それでも人は希望を求め 橋を架ける。
もし渡りきることができたなら

神に会えるのだらう
どうか神さま、柱が橋をしっかりと支え
私の後に続く旅人は この橋を渡り切りますように
そしてあなたは裁きの秤をもちだす
私を業火へと投げ入れるために
私が八百屋だったなら秤がお似合いだっただらう
あるいは商人 宝石売りだったなら
しかしこの秤は罪
この世で最も汚らしいものを量る
恩寵を受けるに値しない人間の財産を
あなたは私のすべてを見て、すべてをご存じです
それなら、なぜ今更私の業を
秤でこれ見よがしに量るのですか
ユヌスがあなたを害することなどあり得ません。
我が秘密はすべてあなたの手に
主よ なぜ一握りの塵に過ぎない人間のことを
あなたが語る必要があるのですか

Yâ ilâhî ger su'âl itsen bana
Bu durur anda cevâbum uş sana
Ben bana zulm eyledüm itdüm günâh
N'eyledüm n'itdüm sana iy pâdişâh
Ben mi düzdüm beni sen düzdün beni
Pür 'ayıb niçün yaratdun yâ Ganî

Gözüm açup gördüğüm zindân içi
Nefs ü hevâ pür-tolu şeytân içi
Habs içinde ölmeyeyin diyü aç
Mismil ü murdâr yidüm bir iki kaç
Nesne mi eksildi mülkünden senün
Geçdi mi hükmüm ya hükmünden senün
Rızkun alup seni muhtâc mı kodum
Yâ öyünün yiyüben aç mı kodum
Geçmedi mi intikâmün öldürüp
Çüridüp gözüme toprak toldurup
Kıl gibi köpri yaparsın geç diyü
Sen seni gel duzahımdan seç diyü
Kıl gibi Sırât'dan Âdem mi geçer
Yâ düşer yâ tayanur ya uçar
Tâ gerek bünyâdı muhkem ola ol
Ol geçenler ey deler'uş toğru yol
Kullarun köpri yaparlar hayr için
Hayrı oldur kim geçerler seyr için
Pes gerek kim anda muhkem ola ol
Kim görenler diyeler uş togrı yol
Terezü kurdun günâhum tartmaga
Kasd idersin beni oda atmaga
Terzi kurarsın hevaset dartmaga
Kasd idersin beni oda atmağa
Terâzû ana gerek bakkâl ola

Ya bazirgân tâcir ü ‘attâr ola
Çün günâh murdârlarun murdârıdur
Hazretünde yaramazlar kârıdur
Sen basırsin hod bilürsin hâlümü
Pes ne hâcet tartasın a‘mâlümü
Çün Yûnus’dan gelmedi hergiz ziyân
Sen bilürsin âşikâre vü nihân
Bir avuç topraga bunca kıyl u kâl
Neye gerek iy Kerîm-i Zül’l-Celâl



イラーヒ訳詞集

İlim ilim bilmektir

本当の知恵とは何なのか ユヌス・エムレ

本当の知恵とは何なのか
知恵とは己を知ることだ
もし己を知らぬなら
何のための学問か
なぜあなたは学ぶのか
真なる御方を知るためだ
学びはしたが 悟っていない
まるで乾いたパンのよう
知識をひけらかしてはならない
信仰心をひけらかしてはならない
真なる御方を知らぬなら
何もかも無駄なのだから
神より下されし四つの書は
この世の始まりを示しているのに
あなたは何も知らないのだ
ユヌス・エムレはかく語る
千度マッカに参るがいい
しかし心の探求に
勝る巡礼などなにも無い

Ey Âşık-ı Dildâde

心を捧げよ ハサン・セザーイー

ああ、アッラーに心を捧げる者に
この甘露を捧げよう
神の愛に酔わずにはいわれようか
この恵みは天より降ってきた
ああ、アッラー 愛しのアッラー
あなたにすべてをささげよう
命は賛美で満たされる
アッラーの他に神は無し
ムハンマドは神の使徒
わが主は甘露の運び手
そして主の美しき名も
その甘き露を一口飲めば
この世の悲しみはたちまち消え失せる
ああ、アッラー 愛しのアッラー
あなたにすべてをささげよう
命は賛美で満たされる
アッラーの他に神は無し
ムハンマドは神の使徒
それを飲めば愛を知る
愛を知る者は心を捧げる
そして愛を人に伝えよ
マジュヌーンとファルハードにも

ああ、アッラー 愛しのアッラー
あなたにすべてをささげよう
命は賛美で満たされる
アッラーの他に神は無し
ムハンマドは神の使徒
この酔言はセザーイーのことば
フェナーイーから学びしことば
我らが主は親愛の御顔を見せ給う
磨かれた我らの心の鏡に

Hak bir gönül verdi bana?

心の息吹 ユヌス・エムレ

神は私に心を吹き込んだ
ことばにできない、この思い
心の息吹 あるときは安らぎを
そしてあるときは涙を
またあるときは凍えるような冬の寒さを
そしてあるときは福音をもたらし
心に樂園が花開く
心の息吹 言葉にできないこの思い
どうして語る事が出来ようか
舌からは真珠が零れ落ちる
悲しみに癒しを与えよう

心の息吹 天座に届き
そして大地に沈み込む
心の息吹はほんの一滴
しかしやがて大海に溢れ出す
心の息吹 イーサー（救世主イエス）のように
死者に命を与えたもう
あるいは傲慢さに埋もれれば
ファラオと共にあったハマンとなろう
心の息吹 ジブリールの許に
慈しみを共に分け与えよ
もし道に迷ったならば
ユヌスは恍惚に迷うだろう

A sultanım sen var iken

我がスルタン、アッラーよ！ ユヌス・エムレ

我がスルタン、アッラーよ！

あなたがいながら

私はどうして他に縋りましょう？

あなたは豊かで、あらゆる罪をお隠しになるのに

私は他の誰に助けを求めましょう？

過ちをお隠しになる御方

寄る辺なき者をお助けになる御方

このユヌスの心を奪った御方
他の誰に継ることがあるでしょう？



2024 年、東京ジャーミイ文書館主催「イスラーム古典読書会」は開始から 3 周年を迎えました。その初回は 2021 年、講師に山本直輝氏を迎え、「ユヌス・エムレの詩の世界」と題し、日本とイスラームに縁のある若者が主体となったネットワーク「ヤングムスリム倶楽部」の協力のもとに開催されました。本コラム集は山本直輝氏によるウェブ上への寄稿と、グフロンヤジッド氏の挿画を編集したものです。

ユヌス・エムレ 心の言葉

イスラーム古典読書会 コラム集

訳・解説 山本 直輝

挿画 グフロン ヤジッド

制作 東京ジャーミイ文書館

institute@tokyocamii.org

